

令和6年度
学校評価結果報告書
(年度末結果報告書)



京畿通商高校との交流（朝鮮通信使）



修学旅行（横浜中華街）



テーブルコーディネート講習会（クッキングコーディネート室）



フロンティアⅡ全体発表会（多目的ホール）

呉市立呉高等学校

令和6年度学校経営計画

令和6年度～8年度

校番	1	学校名	呉市立呉高等学校	校長氏名	小田 浩	全日制	本校
----	---	-----	----------	------	------	-----	----

1 教育目標

地域課題の解決に貢献し、持続可能な社会の担い手として新たな価値を創造する、心豊かでたくましい人材を育成する。

2 三つの方針

① 育成を目指す資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー）

深い学びを実現するために、身につけた知識・技能を活用できる。【知識・技能】【発信力】
目標の実現に向け、課題を解決するために、不断の努力ができる。【思考力】【課題解決力】
「自立」と「自尊」の精神で主体的に学び、他者と協働して社会貢献できる。
【持続可能な社会への意識】

② 教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）

一人一人の進路選択に必要な教科・科目を主体的・効率的に学習できる。
興味・関心のある分野の教科・科目を主体的に探究・表現する力を育成できる。
進路実現に向けて主体的・協働的に学びをデザインできる。

③ 入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）

「高き夢をいだけ そして 君が夢みた君になれ」という本校のスローガンに共感し、学業はもとより、部活動や課外活動にも積極的に取り組むことのできる、主体的・協働的な学習者を受け入れる。

3 中期（3年間）経営目標及び行動計画等

中期(3年間)経営目標	評価指標	目標値	実績値	
			初年度	次年度
希望する進路の実現を可能にする確かな基礎学力を身に付けさせる。	第1 志望達成率	85%	95.6%	83.3%
総合学科の特色を生かした学びの広汎な展開により、課題発見・解決能力を高める。	身に付けさせたい力の伸長に対する自己評価	1年60% 2年70% 3年80%	1年81% 2年75% 3年88%	1年65% 2年78% 3年83%
生徒の規範意識や社会性を高め、自立した社会人としての資質・能力を身に付けさせる。	規範意識に対する肯定的評価	90%	99%	99%

【評価基準】

A: 目標を完全に達成した。 B: 目標を概ね達成した。 C: 目標をあまり達成できなかった。 D: 目標をまったく達成できなかった。

4 短期（本年度）経営目標及び行動計画等

中期（3年間）経営目標

（1）希望する進路の実現を可能にする確かな基礎学力を身に付けさせる。

短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	目標	実績値	評価	理由	担当分掌
自律的学習習慣の確立	生徒手帳と学習時間調査による家庭学習の定着	Classi の学習時間入力状況	100%	94%	B	1年95%，2年92%，3年95%で，入力習慣は概ね定着しつつある。	進路指導
基礎的・基本的な学習内容の定着と活用能力の向上	授業における基礎的・基本的な知識・技能の活用	1月模試の偏差値50以上の科目が1つ以上の生徒	1年40%	19% (31人)	C	国23人，数6人，英10人が達成しているが，目標値にはまだ及ばないため。	進路指導
			2年50%	38% (51人)	C	国27人，数28人，英7人が達成しているが，目標値にはまだ及ばないため。	
	授業における基礎的・基本的な知識・技能の定着	定期考査または小テストの「知識・技能」の問題の正答率60%以上の生徒	70%	54.2%	C	第1学期定期考査（中間・期末）等，第2学期定期考査（中間・期末）等の平均が54.2%で目標値より差が開いてしまったため。	教務
希望進路の実現	組織的進路指導体制の構築	第1志望達成率	85%	81%	-	3月初旬現在137名が進路先を決定している。	進路指導
	個別指導体制の強化	国公立大合格者数	12名	-	-	年内7名合格，現在11名が国公立大学受験に向けて取組中である。	進路指導
授業改善の積極的推進	発問の工夫・ICT機器の活用を取り入れた授業展開	授業アンケート最肯定の割合	70%	76%	A	1回目（74%）より数値があげることができたため。	教育研究
	発問の工夫・ICT機器の活用を取り入れた授業展開	ICTに関する研修の回数	3回	1回	C	ICTの研修会が年間を通して3回設定されていなかったため。	
業務改善による生徒と向きあう時間の確保	定時退庁の実施率向上と年休取得の推進	勤務時間外在校時間月平均45時間以内の教職員の割合	70%	52%	C	年間を通しての数値は達成できてないが，11月，12月，1月と3ヶ月連続で前年度の人数を上回っている。	管理職

中期（３年間）経営目標

（２）総合学科の特色を生かした学びの広汎な展開により，課題発見・解決能力を高める。

短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	目標	実績値	評価	理由	担当分掌
ESD・SDGsの視点を取り入れた教育内容づくりの推進	「産業社会と人間」ライフプラン策定，「フロンティアⅠ・Ⅱ」の体系的指導	意識調査の「身の回りのことや社会の課題の解決策を考えている」の肯定的評価の割合	1年 60% 2年 70% 3年 80%	1年 59% 2年 71% 3年 80%	B	2・3学年は目標値を達成できたが，1学年が達成できなかったため。	教育研究
特色ある学校設定科目の教育内容の充実	「防災」選択者の「防災リーダー」としての育成	選択者の校内外での活動回数	5回	6回	A	自衛隊と2回，呉市と2回，消防署と2回連携して実践活動できた。	教務
	「呉学」「看護基礎」「福祉基礎」「保育実践」「調理2」等における専門機関とも連携した高度な教育内容の提供	専門機関等との連携回数	15回	18回 (41回)	A	目標数値を超えたため。	
生涯学び続ける意識の醸成	資格取得の促進	合格率	80%	82.9%	A	資格受験者に対し，合格率が82.9%で，目標は達成できているため。	教育研究
	読書習慣の確立	年間10冊以上読んだ生徒の割合	10%	1年 5% 2年 4% 3年 3%	C	各学年とも10%に達していないため。	
グローバルに活躍する人材の基礎の醸成	姉妹校との相互交流によるグローバルマインドの向上	姉妹校との相互交流の回数	3回	6回	A	グローバルマインド向上の観点から姉妹校ではないが朝鮮通信使再現行列訪問団（大韓民国プチョン市の高校）の来校による交流，米国ブレマトン市の高校とのオンライン交流をしたため。	総務企画部
	異文化理解促進のための交流の場の積極設定	異文化理解に繋がる実践の回数	3回	4回	A	JICAの研修員を招きエジプト，ウガンダ，ザンビア，モザンビークについて日本との共通点や相違点を考えることができた。	総務企画部

中期（３年間）経営目標

（３）生徒の規範意識や社会性を高め、自立した社会人としての資質・能力を身に付けさせる。

短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	目標	実績値	評価	理由	担当分掌
規範意識や社会性を高める	時間・期限への意識を高める	１日の遅刻者数	1.20人	1.71人	C	昨年度よりも0.41ポイント上がった。	生徒指導
	ルールの意味を考え尊重する意識を高める	特別な指導の回数（携帯電話によるものを除く）	5回	13回	C	昨年度よりも特別な指導の件数は増加したため。	生徒指導
		生徒の規範意識に対する肯定的評価	95%	99%	A	多くの生徒はルールを守っているという意識は持っている。	生徒指導
生徒支援の体制の拡充	教育相談活動を充実させる	教育相談に対する肯定的評価	90%	92%	A	教職員との信頼関係が構築されていると考えられる。	生徒指導
	困り感のある生徒への具体的支援	全体研修や専門機関との連携、学年会等での協議を経て生徒・保護者にはたらかせを行った回数	3回	3回	A	困り感のある生徒は増加の傾向があり、全体研修や学年会と連携して行っており、必要に応じてスクールカウンセラーと連携している。	
部活動の充実により、活動実績を向上させる	部活動による学校生活の充実	部活動加入率	85%	86%	A	コロナ下の影響が続いており、加入率は目標は上回っているが、減少傾向にある。	生徒指導
	適切な目標設定と計画的活動により部活満足度を高める	中国大会以上の大会等への出場、県大会ベスト8以上の進出、またはそれに準ずる成績を収めた部活動数	6団体	5団体	B	目標を少し下回った。	生徒指導
		部活動への取組に対する肯定的評価	85%	85%	B	加入率は下がっているが、部活動に参加している生徒の部活動への意識は高い。	生徒指導
貢献の意識の醸成	ボランティア活動への積極参加と「学び」への連結	ボランティア活動への延べ参加者数	400人	597人	A	参加者の延べ人数が目標を上回り、150%に近い値のため。（2月1日現在）	総務企画部
		自尊・貢献に対する肯定的評価	70%	90.4%	A	学校評価アンケートより自尊・貢献に関わる項目で1年91.7%、2年84.8%、3年94.8%の肯定的評価となったため。	総務企画部

【最終評価結果の分析】

<管理職>

- SSSの導入により、教職員の印刷・配付・保存等の事務的業務量の削減が図られている。しかし、部活動時間については、土日や平日の勤務時間外における在校等時間がコロナ禍以前に戻っているため、一学期は8月しか目標を達成できなかった。しかしながら、面談等を通して、在校時間が多い教員に意識の啓発を図ったことで、11月から3ヶ月連続で在校時間が減少した教員が前年度より増加した。

<教育研究部>

- 授業改善の積極的推進

第2回目の授業評価アンケートにみる発問の工夫・授業展開についての最肯定の数字は全学年平均で75.7%（1回目73.7%）と1回目より伸ばすことができた。昨年度は1回目72%、2回目75%であったため、今年度よりも各教科での工夫が奏功したと考えられる。ICTの研修は4月4日に1回目を実施した。昨年度に比べ各教科の授業でICTを活用する場面は増えているように見受けられるため、今後はファシリテーターとしての授業づくりなど、指導方法の研修を実施していきたい。

- ESD・SDGsの視点を取り入れた教育内容づくりの推進

学校評価アンケート（総務企画部）では項目14「『産業社会と人間』『フロンティアⅠ・Ⅱ』の授業を通じて自分の身の回りのことや社会の課題について理解した上で、よりよくなるための解決策を考えている」と回答した生徒は今回は1年次生で58.6%（1回目53.9%）、2年次生が70.5%（1回目73.9%）、3年次生が80.0%（1回目76.8%）であった。

1年次生は、社会人講演会や進路別学習、企業訪問など、現代社会についての理解や進路について考える取組を実施してきた。しかし、社会の中で自分の果たす役割などを、自分事として十分に考えることができていない生徒がいるために目標値（60%）を達成できなかったと考えられる。2年次生は、呉地区の課題とその解決策を考える取組を行ったため、目標値（70%）を達成できたと考えられる。しかし、2回目の数値が少し下がった原因としては、個人研究のテーマ決定に向けての取り組みの中で、自分の研究したいことを、社会の課題の解決策と結びつけることができなかったためだと考えられる。3年次生は中間評価を受けて各ゼミでのきめ細かい指導もあり目標値（80%）が達成できた。

- 読書習慣の確立

生涯学び続ける意識を醸成するためにも、主体的な読書習慣を身に付ける必要がある。しかし、1月末で、10冊以上を読破した生徒は1年次生5.0%、2年次生3.7%、3年次生3.2%であった。現在、8冊以上読破した生徒の数を合わせても1年次生は7.54%、2年次生は8.95%、3年次生は5.12%で、各学年とも10%には達することができない。各学年とも平均して1～2冊程度の本を読んでいるなかで、98冊や68冊など、1年間で10冊上の本を読んだ多読の生徒も17名いる。

<教務部>

- 本年度から、定期考査または小テストにおける「知識・技能」問題の正答率60%以上の生徒を70%以上にする取組についての分析を取り入れた。今回の対象は、第1学期中間考査と期末考査、第2学期中間考査と期末考査の計4回である。第1学期中間考査は45科目で達成率は65.0%、第1学期期末考査は66科目で達成率は64.0%で、第2学期中間考査は44科目で達成率は51.4%、第2学期期末考査は65科目で達成率は45.7%、全体の平均は54.2%であった。この評価目標にした理由は、各科目の知識・技能を問う問題で基礎・基本の定着を図ることができ、それが達成されることで思考・判断・表現につながっていくと考えられるからである。また、教員一人一人が指導と評価の一体化を意識しながら授業を行っていくことで基礎・基本の定着が図られると考える。この度の結果は、中間報告時（64.4%）に比べ目標値の70%から少し遠ざかった。

- 特色ある科目において外部との連携を行っており、専門的な知識を習得する機会を多く設定できている。また、今年3年目となる「呉学」は、呉の魅力について伝えるために「広島国際大学」や「月刊くれえばん」など、多方面と連携するような授業を展開しており、さらに全18グループが呉の魅力を伝えるべく、呉の食に関するテーマで呉を代表する有名店と連携を取り、取材を行った。家庭科の科目については、例年よりさらに多くの事業所と連携をした。

「呉学」はくれえばん及び広島国際大学、中国新聞社、呉市内の16事業所と連携、「看護基礎」「福祉基礎」は基本的に広島文化学園大学と連携の上で運用。加えて、「福祉基礎」では呉市東部包括支援センターをはじめ、6事業所（計7回）と連携し授業を行った。また、家庭科の科目で7回外部と連携を行い、生徒個人で7事業所と連携した。

- 資格取得については、本年度は、昨年度までの受験率から受験した生徒の合格率目標を変更したため、目標値を達成している。それぞれの資格取得に向けて、事前にしっかりと取り組んだ結果、合格率が上がった。

<進路指導部>

- Classiへの学習時間の入力について、月・火曜日で、生徒への声掛け・指導を行っている。昨年度中

間評価の実績値 78%から 16 ポイント数値を上げている。各学年の粘り強い取組が功を奏しており、月曜のチェックでは未入力の生徒が多くみられることが次の課題として考えられる。また、平日・休日を含めた学習時間の平均は、1 年次生が 51 分、2 年次生が 70 分、3 年次生が 94 分となっており、年次進行で増えてはきているが、1・2 年次に学習習慣が定着しているとは言い難い状況である。受験期だけでなく、高校入学時からの学習習慣の定着を図る取組を各教科の教科指導計画と併せて具体的に考えていく。

- 1, 2 年次生の評価指標として、1 月実施の「ベネッセ総合学力テスト」を用いた。1, 2 年次生の 3 科目総合で偏差値 50 以上の生徒は 6 名、2 名となっていることや、過去 4 年間の平均値との比較をすると、1, 2 年次ともに偏差値 50 以上の生徒の割合が下がっている科目が多い。それに対する各教科・学年の取組が必要と考える。
- 希望進路の実現に向け、3 年次生の 90%以上が年内に行われる入試／就職試験に挑む傾向にある（うち 76%が合格・入学／入社手続き済）。年内の就職試験や大学・専門学校の第 1 志望進路先への合格率は昨年度実績では 81.2%と高い水準である。また、国公立大学進学希望者に対しても、個々の指導担当を決め、取り組んでいるところである。

＜生徒指導部＞

- 現時点での遅刻状況は昨年度数値より増加している（1.71 人）。基本的生活習慣に対する規範意識は定着しているが、遅刻に対する意識は低下しており、昨年を大幅に上回った。一方、遅刻傾向の生徒には早朝登校による指導を実施しており、昨年より改善された。遅刻・欠席について始業式等の生徒指導講話で改善を促しているが、遅刻者が 2 桁となる日もある。
- 現時点で特別な指導対象の事案は 13 件発生している。生徒の規範意識に対する肯定的評価は 99.3%を示している。全体的に落ち着いた学校生活が維持されているが、個別に支援を要する場合も増えている。
- 教育相談に対する肯定的評価は、本年度 91.7%であった。カウンセリングマインドに対する教職員の共通理解は深まり、教職員間のコミュニケーションも図られ、組織的に取り組まれているケースもあるが、組織的な取組を充実させていくことが必要である。
- 部活動では上位入賞や上位大会への出場団体数は例年と同程度だが、大きな実績をあげている。部活動加入率は昨年度に比べて微減したが、生徒の部活動に対する肯定的評価は 85%と高い。

＜総務企画部＞

- 本年度は 9 月に台湾の安樂高級中学が来日し、文化祭初日には本校生徒の発表を見学し 2 日目には食品関係のバザーも出店した。また、ホームステイを経験したことでこれまでとは異なる交流ができた。さらに 10 月に韓国京畿（キョンギ）道富川（プチョン）市の京畿国際通商高等学校の生徒が朝鮮通信使再現行列訪問団として来校し、音楽による相互交流をはじめ、プレゼント交換や記念撮影などで親睦を深めた。12 月には広島大学の研究員生の方に来校して頂き『呉学』で作成している呉の特産品に関わる記事などを英文訳する際に、多くのアドバイスを頂き製本することができた。本年 1 月には JICA の研修員（エジプト、ウガンダ、ザンビア、モザンビーク）の方に日本との共通点や相違点について画像やスライドを見せて頂きながら考えることができた。
- ボランティア活動の参加生徒の延べ人数は目標を超え、150%に近い達成率だった。昨年度の達成率が 130%（2 月 1 日時点）だったことを考えると、ボランティア活動においても、本校生徒のボランティアに対する意識が高まっていると考える。

【今後の改善方策】

＜管理職＞

- 定時退校日が徹底できるように呼びかけを継続する。各部において、顧問を中心に、短時間の活動であっても成果を挙げられる部活動を模索していく。ICT 推進委員会及び業務改善推進委員会を中心に、ICT 化による業務改善をさらに推進する。業務改善が「生徒と向きあう時間の確保」につながるように、教職員の目的意識を高める取組を今後とも展開する。

＜教育研究部＞

- 授業改善の積極的推進
ICT の研修を 1 年間の研修計画の中に ICT 研修が位置づけられていない。今後は研修計画の中に ICT だけでなく、授業をファシリテートすることについての研修を実施することで、さらなる授業の効率化・学習内容の深化を図っていきたい。
- ESD・SDGs の視点を取り入れた教育内容づくりの推進
学校評価アンケート（総務企画部）の項目 7「『産業社会と人間』、『フロンティアⅠ・Ⅱ』の授業は、自分の生き方を考え、希望する進路を実現することに役立っている」では 1 年次 94.9%, 2 年次 94.7%, 3 年次生 99.4%の生徒が肯定的に回答している。1 学期末の調査よりもすべての学年が数値を伸ばすことができている。探究活動を自分事にするためにも、指導者の姿勢が重要になってくる。本

学校評価では「自分の身の回りのことや社会の課題について、解決策を考えた上で、解決に向けて行動することができた」「自分の身の回りのことや社会の課題について理解した上で、よりよくなるための解決策についても考えた」の合計の数値で見取っているため、今後は探究活動を通して実践力も身に付けていけるように支援していきたい。

○読書習慣の確立

卒業研究を一人で仕上げるためにも読書習慣は必須である。自身の研究のためにはどのような情報が必要なのか、その情報をどう取舍選択するかなど、思考力・判断力・表現力の基礎になるのが、確かな読書に裏付けられた情報である。今後はすべての学年にフロンティアⅡの卒業研究のために、論文検索で探した論文を理解する力や、自分の研究の根拠になる文献を読破する力が必要である。

＜教務部＞

- 知識・技能の正答率については、生徒の実態をしっかりと把握した上で問題を考えていかなければならない。そのため、小テストや単元テストなど授業内での生徒の理解度の把握に努め、定期考査問題について教科内で吟味し、より多くの生徒に基本的な力を身に付けさせる取り組みをしていく必要がある。教科の特性もあるため、一概には言えないが、基本的な事項を習得させるためにさらに授業等工夫していく必要がある。また、教科の特性によっては定期考査のみでは測れない内容でもあるので、知識・技能の定着の見取りをもう一度検討することも必要である。
- 「呉学」では年間を通じて、多くの事業所と連携を取ることができた。最終的には小冊子を完成し、新しい授業の在り方を提案できた。また、福祉基礎の授業においては、6事業所と連携することができ、様々な角度から福祉について考えることができた。家庭科の科目についても、多くの事業所と連携できたので、引き続き行っていきたい。
- 資格取得については、家庭科及び情報科の授業を選択している生徒が多くの特検を受けて合格している。さらに、外国語科では実用英語技能検定を年3回受験する機会がある。受験の声掛けをさらに増やすとともに、他教科においても可能な検定試験の受験機会を作っていく。また、折に触れて資格の重要性や生涯学習の必要性を生徒に対して啓発していく。

＜進路指導部＞

- 「自律的な学習者」の育成を目指し、今後も粘り強く指導を続ける必要がある。昨年度から「家庭学習定着期間」として毎学期の期末考査時期に家庭学習を強化する取組を始めた。この取組はClassiの日々の入力完了とともに、「平日2時間・休日3時間以上」の学習時間確保の意識づくりを狙っている。また、個々の学習時間についても、教育相談等で各自の希望進路に合わせて確認・指導を行う取組を進めていきたい。
- 模試に対する取組について、今年度から授業改善や学年の学習意欲の意識付けの材料として、模試分析後の改善策について分析者のコメントを生徒に返すようにしている。
- 担任を中心とした3学年団の先生方には、生徒の進路選択・決定において不利益にならない取組になるよう、引き続き細心の注意を払って入試事務を行っていただく。また、今後も生徒・保護者との連携を密に、丁寧に組織的な進路指導を行う。国公立大学進学希望者を増やす取組としては、現1、2年次生の学習の質を高めることと同時に、本校の恵まれた教育環境を存分に活用した「実績作り」を機会があるごとに生徒に勧めていき、早期に進路意識を高めていく取組が今後求められると考える。

＜生徒指導部＞

- 目標値である1日1.0名以下の遅刻指導を継続していく。全体の遅刻者が2桁になる日もあり、欠席、遅刻早退をしないという意識付けを節目の講話等で行っていくと同時に、遅刻者への生活改善に取組む指導を新たに行っていく。保護者との確実な連携や学年や分掌との速やかな連携等を徹底する。
- 全教職員が生徒指導規程の共通理解のもと情報交換、情報共有を心掛け、多面的な生徒理解を図ることにより、組織的かつ継続的に生徒指導に取組み、問題行動の未然防止に努める。そのため、共感的人間関係を基盤とした生徒への声かけを行ったり、生徒指導に係る研修会等を計画的に実施したりすることで、教職員個々の指導力の向上を図る。
- 計画的な部活動運営に対する共通理解を図るとともに、生徒の部活動に対する肯定的評価を更に高める。また、各種大会以外でも部活動に対する充実感を得られる取組を設定していく。

＜総務企画部＞

- 本年度行った事業を継続して執り行うことで生徒の国際交流の意欲を高めると同時に諸外国の方と接する経験値を増やし物おじしない姿勢や言動につなげることが必要だと考える。
- ボランティア活動に参加する生徒は、2年次生に参加者が多いのに対して、1・3次生の参加人数が低くなっている。総務企画部だけでなく、生徒指導部（生徒会担当）の協力も得ながら、ボランティアに関する積極的な啓発活動を行い、ボランティア活動に対する全校的な関心・意欲のいっそうの高まりを目指したい。

別紙:現状分析

外部環境	O (支援的要因) ①小・中学校, 高等専門学校, 大学等が隣接している。 ②PTAが学校に協力的である。 ③市呉の存在が市民から注目されている。 ④市内の各団体から支援を期待できる。	S (強み) ①総合学科の特性を生かし, 多様な選択科目を設定している。 ②挨拶, マナー, 時間厳守, 服装等の生活規律が徹底している。 ③地域・社会に貢献しようとする意欲が旺盛な生徒が多い。 ④部活動が活発で, 多くの部が上位大会進出を果たしている。 ⑤教育相談体制が整備されている。 ⑥本校への進学希望者が多く, 中学生からの支持を得られている。 ⑦「産業社会と人間」から「フロンティアⅠ・Ⅱ」に至る一連の取組が進路実現に有効である。	内部環境	「支援的要因と強みを生かす」 ○近隣の教育資源等の活用を促進する。 ○PTAと連携し, 協働して教育内容を創造する。 ○総合学科の特性とESDの研究指定の成果を生かして, 身に付けさせたい5つの資質・能力の育成を図ることにより, 生徒の進路実現につなげる。 ○生徒の学力の向上, 規範意識や社会性, 奉仕の精神を涵養する指導を充実し, 市民等から誇りに思われる生徒を育成する。 ○部活動の充実により, 自己肯定感を高めつつ, 活動実績へとつなげていく。
	T (阻害的要因) ①県立学校教員との人事交流が少なく, 教職員の年齢構成の偏りが解消されない。 ②情報不足や入手の遅れ等のため県立学校と帯同した動きが困難な場合がある。 ③生徒の多様な進路目標に対する対応力を高め切れていない。	W (弱み) ①高い目標を実現しようという意欲や態度を十分には育成できていない。 ②一般入試で求められるレベルまで基礎学力を高め切れていない。 ③家庭学習時間が少ない。 ④多様な選択科目の開設に必要な選択教室や実験・実習室等が不足している。		「阻害的要因と弱みを克服」 ○校内授業研究を充実するとともに他校の公開研究授業等に積極的に参加する体制を整える。 ○ESD・SDGsの視点を取り入れ「産業社会と人間」「フロンティアⅠ・Ⅱ」の系統性を高め, 学際的な深い学びを実現する。 ○個別指導の徹底とその支援体制を構築し, 進路実現につなげる。 ○学校の方針や情報等を積極的に発信する。 ○様々な機会を捉えて生徒・保護者に進路情報を提供し, 低学年次から段階的に進路意識を高める。

1 生徒の高い志や夢を実現する。

○総合学科としての特色を生かした教育活動の充実を図る。

- ・キャリア教育を柱に, 生徒一人一人が自立した社会人・職業人として将来を展望し, その実現のために必要な教科・科目を適切に選択できるよう, 教育課程を編成・実施する。
- ・地域社会の担い手としての素養を高め, 持続的発展が可能な社会の構築のために行動できる人材を育成する。その実現に向けて教育活動の体系化・構造化を図り, 「地域課題解決型キャリア教育」のカリキュラム開発と実践を行う。

○希望する進路を確実に実現できる学力を身に付けさせる。

- ・「広島版『学びの変革』アクション・プラン」に基づき, 主体的・能動的で学習者基点の深い学びを促進する授業づくりを行う。
- ・発問の工夫, ICT機器の活用, ESD・SDGsの視点を取り入れた授業改善を推進し, 生徒に自律的学習者としての意欲と態度を身に付けさせる。

○教科学習や部活動の成果として, 各種大会・コンクール, 資格取得等で全国レベルの実績をあげる。

2 地域の誇りとなり得る高校となる。

○生徒指導を徹底し, 自立した社会人としての規範意識や社会性を涵養する。

- ・全教職員で生徒指導規程の共通理解を図り, 統一的な指導を行う。
- ・学校生活において生徒指導の三機能を生かした指導を行う。

○ボランティア活動のさらなる充実を図り, 貢献の意識を醸成するとともに「学び」との連結を図る。

○学校情報を積極的に発信し, 保護者や地域の期待に応えるとともに, 本校の教育力を生かして, 小・中学校教育の充実・発展に寄与する。

○不祥事を許さない組織風土を醸成するとともに, 教育活動のあらゆる場面において, 生徒・保護者・地域から信頼される教職員の姿を示す。